

## 研究ノート

## 歴史学者による Wikipedia 参加の可能性

田尻 健太

## はじめに

- 1 Wikipediaとは
- 2 Wikipediaと専門家の関わり
  - 2-1 Wikipediaに対する専門家の過去の取り組み
  - 2-2 Wikipediaにおける専門家の役割
  - 2-3 専門家による Wikipediaへの協力の方法
  - 2-4 Wikipediaの執筆に当たって
- 3 歴史関連の記事ならではの問題点
  - 3-1 検証可能性
  - 3-2 独自研究
  - 3-3 Wikipediaと歴史問題

おわりに

## はじめに

たとえば、秦の始皇帝について知りたい人がいたとしよう。その人がいわゆる「専門家」ではない場合、どういう手段を取るだろうか。おそらく、PC やスマホのブラウザの検索窓に「始皇帝」と打ち込んで調べる人がほとんどであろう。その検索結果は、2022 年現在においては、まずオンライン百科事典「Wikipedia」の記事である[[始皇帝]]がトップに表示され、次に辞書の横断検索サイトである「コトバンク」(<https://kotobank.jp/>)、そして YouTube の解説動画、ブログ記事などが上位に表示されることが多い。

コトバンクの記述は辞書の引用であり、内容の信頼性は比較的高いが、解説の量は不足していると言わざるを得ない<sup>1</sup>。項目にもよるが、詳細な記述を求めれば、多くの場合は Wikipedia を選択することとなる。また、YouTube やブログの記事なども、結局はそのソースが Wikipedia にある場合も多いだろう。そして周知の通り、これは「始皇帝」に限った現

<sup>1</sup> 「コトバンク」とは、オンラインで提供されている、百科事典、人名辞典、国語・英和・和英辞典、現代用語辞典、専門用語集などから用語を横断検索できるサイトである。

(参照：<https://kotobank.jp/about/>)

象ではなく、多くの歴史用語において同様である。一般の人々が、手軽に歴史関連の情報を得ようとする際、Wikipediaが最初の選択肢になりやすい現状がある。

実際、学生の Wikipedia の利用状況をアンケート調査した研究において、十年ほど前からすでにその認知度や利用頻度の高さが示されている<sup>2</sup>。この状況はテレビマンや新聞記者、フリーライター等においてもある程度当てはまると考えられ、一般社会に広く拡散されるメディアの情報の源が Wikipedia にあるケースも多いと推測される<sup>3</sup>。

つまり、現在、非専門家が知識を得る場所として、Wikipedia は非常に重要な地位を占めているのである。従来のように、「 Wikipedia は誰が書いたか分からないものなので見ないでください」と教育するだけでは済まない時代になってきたと言えよう。

であるとすれば、むしろ「 Wikipedia を改善すること」によって、よりよい形で非専門家へ、そして社会全体へと専門知を提供できると考えるべきではないだろうか。少なくとも、社会への影響力という観点から見れば、専門知を広く共有する場として、Wikipedia が非常に優秀なプラットフォームであることは何人も認めざるを得ないところである。

幸い、Wikipedia はオンライン上で誰もが編集できる百科事典である。金銭的負担は一切必要なく、編集方法もそれほど複雑なものではない。「 Wikipedia は質が低い」と嘆くのであれば、まずはその世界に飛び込み、自分で編集するのが手っ取り早い。専門家が専門分野の記事を執筆すれば、当然その記事の情報の質は高くなることが期待される。また、専門分野でなくとも、学術的な訓練を経た者は信頼性の高い情報源に当たって情報を収集することに慣れているから、質の高い記事を執筆しやすいだろう。

筆者はこれまで、 Wikipedia の熱心な執筆者と専門家が交流する場（詳細は後述）に参加し、様々な助言を受けながら、専門である中国史・中国思想の分野に関する Wikipedia の執筆を行ってきた<sup>4</sup>。筆者は Wikipedia の専門家ではないが、こうした活動を通して、歴史研究に携わる者がどのような態度で記事を執筆すべきかという点については、ある程度の知見を得ることができたと考えている。

本稿は、こうした観点から、歴史学者が Wikipedia を執筆する際の具体的な方法について紹介し、合わせてそのことの社会的意義を検討する。

### [凡例]

- ・本稿においては、 Wikipedia 日本語版の記事に言及する場合、 Wikipedia の記法に倣

<sup>2</sup> 高校生から大学生に対する調査で、 Wikipedia の認知度はほぼ 100%、使用頻度が月一回以上の者は 50% 前後との結果が出ている（長塚・神野, 2011）。また、大学生に対する調査で、 Wikipedia を週に一回以上用いる者が過半数、レポート作成時に使用する者も過半数であるという結果が出ている（佐藤ほか, 2016）。

<sup>3</sup> たとえば、図書館のレファレンスで Wikipedia が出典として挙げられるケースも多い。「レファレンス協同データベース」(<https://crd.ndl.go.jp/reference/>) の詳細検索で「回答」を指定した上で「 Wikipedia 」を検索すると、レファレンスの回答で Wikipedia を用いるものを数多く見つけることができる。この点は、早稲田 Wikipedia サークルの大宮さんご教示による。

<sup>4</sup> 筆者が実際に作成・加筆修正した記事は、[[利用者:Gynaeocracy]] を参照。

って、[[ ]]で括って示す。例えば [[史記]] と書いた場合、これは「史記」という Wikipedia の記事を指し、「<https://ja.wikipedia.org/wiki/史記>」が当該記事の URL となる。同様に、[[Wikipedia:検証可能性]] は、「<https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:検証可能性>」が URL となる。「Wikipedia:」から始まる記事は、Wikipedia 自体の運営・方針・管理などに関わる項目である。

- Wikipedia の記事は常に更新される可能性があり、以下に記す内容が読者のアクセス時には変更されていることもあり得る。本稿の内容はあくまで 2022 年 1 月時点での記事を元にしていることには注意されたい。ただ、Wikipedia の記事には「履歴表示」機能があり、筆者が執筆した当時の記事の記述は容易に確かめることができる。
- Wikipedia 以外のウェブサイトについては、いずれも 2022 年 1 月 18 日に閲覧した時点での内容をもとに言及している。

## 1 Wikipedia とは

そもそも Wikipedia とは、2001 年に WEB 上に設立されたオンラインの百科事典である。2003 年以降は非営利団体の Wikipedia 財団によって運営され、その資金は利用者からの寄付によって支えられている。また、Wikipedia の姉妹プロジェクトに、参考書・教科書を作成する「Wikibooks」、二次利用自由のテキストを集める「Wikisource」、多機能辞書を製作する「Wiktionary」などが存在し、それぞれ異なる目的の下に運営されている。Wikipedia は多言語で提供されており、本稿執筆時点で 323 言語の Wikipedia が開設されているが（[[Wikipedia:全言語版の統計]] を参照）、本稿で対象とするのは日本語版の Wikipedia である。基本的な Wikipedia の方針は言語を超えて共有されているが、本稿の議論の内容には日本語版 Wikipedia に特有の問題も含まれていることは注意されたい。

Wikipedia の概要については [[Wikipedia: ウィキペディアについて]] に詳しいほか、[[Wikipedia: ウィキペディアは何ではないか]] に否定形の連続という形を取って Wikipedia とは何たるかが定義されている。合わせて、日下、2002 も参照されたい。

ここでは、本稿の論旨と深く関わる Wikipedia の特性として、オンライン上で「誰でも」編集が可能であるということについて論じておく。誰でも編集可能という特徴は、一般的な辞書・事典と異なり、ある項目がいわゆる「非専門家」によっても執筆されうることを示している。専門家が執筆すれば必ず問題のない辞書項目が完成するというわけではないが、非専門家による執筆は Wikipedia の記事内容の信頼性の欠如を招きやすいし、さらにそれによって専門家が Wikipedia を敬遠するという悪循環が生まれかねない。

この問題について、オンライン百科事典のプロジェクトである Microsoft の「Encarta」

や、Googleの「Google Knol」など、執筆者を専門家に限り、クローズドな場でオンライン百科事典を作る試みもかつては存在した。しかし結果的には、両プロジェクトとともにサービスを終了し、現在は類似のサービスとしてほぼ Wikipediaだけが生き残っている状態である<sup>5</sup>。この状況を見ると、非専門家にも編集の門戸が開かれているという Wikipediaの特性こそが、Wikipediaが存続・発展し、社会に対して大きな影響力を持つようになった理由であるという推測が成り立つ。実際、Wikipediaにおいてアクセス数の多い記事は、世間一般でいう「学問」の枠には入らない、芸能関係の記事などが多数を占めている（[[Wikipedia:日本語版の統計#閲覧回数の多いページ]]を参照）。

Wikipediaの特性と獲得した影響力の関係については、近年のいわゆる「学者嫌い」の風潮など、さまざまな事象を含めて議論していく必要がある。ただ、本稿ではこの問題についてはこれ以上は議論せず、誰でも編集が可能である Wikipediaに対して、(特に歴史分野の)専門家がいかに向き合っていくべきか、ということを主眼に据えて議論を進める。

## 2 Wikipediaと専門家の関わり

### 2-1 Wikipediaに対する専門家の過去の取り組み

Wikipediaはその影響力の増大につれて学界からも注目を集め、近年には、専門家の協力のもとで Wikipediaを改善しようという試みが日本でも行われ始めた。専門家が個人のレベルで Wikipediaに協力してきた水面下の例も多いと思われるが、ここでは学界の中での協働的な取り組みをいくつか紹介しておく。

まず、土木学会応用力学委員会の「応用力学 Wikipediaプロジェクト」が挙げられる<sup>6</sup>。土木学会応用力学委員会は、「ウィキペディアによる専門知識の発信」「編集作業を通じた学生教育」「学術団体による社会貢献の新形態の提案専門知識の発信」を三本の柱とし、土木工学・応用力学の用語に関する Wikipediaの記事の充実化を図っていた。その具体的な活動内容は、プロジェクトメンバーが主に自分の分野から担当する項目を選んで執筆・編集したのち、メンバー間で記事を検討・審査し、記述が正確かどうか、学部生や専門外の人にも分かりやすい文章・単語を用いているなどをチェックし、記事として公開するものである。

次に、日本科学史学会第 63 回年会シンポジウムにおいて、ウィキペディアン (Wikipedia 執筆者) と専門家の交流が図られ、ウィキペディアンが自らの執筆の方法や記事の内容を紹介し、それに専門家がコメントするといった試みが行われた<sup>7</sup>。同様に、ウィキペディアン

<sup>5</sup> この点は、早稲田 Wikipedian サークルの大宮さんのご教示による。

<sup>6</sup> 山川ら, 2013 を参照。

<sup>7</sup> 北村ら, 2016 を参照。

と専門家の交流を図る試みとして、伊藤陽寿氏が中心となり定期的に開かれている「ウィキペディアンと琉球・沖縄史の専門家との交流を通し、沖縄・琉球関連の Wikipedia 記事充実を図る懇話会」がある（筆者も参加者の一員である）。こうした試みは、専門家が Wikipedia 執筆に直接参加するという形だけではなく、専門家がウィキペディアンに専門知を提供するという形でも専門家は Wikipedia に協力しうることを示唆する。

ほか、直近の取り組みとして、第 72 回日本西洋史学会で北村紗衣氏が中心となって開催された「西洋史ウィキペディアワークショップ—レクチャーと作業セッション—」がある<sup>8</sup>。ここでは Wikipedia に関する基本的なルールと西洋史の記事の現状が確認された後、参加者の専門家の間で具体的な Wikipedia の編集法を共有した。この取り組みの成果として、[[Portal:歴史学/西洋史]]に数多くの参考文献が追加され、当該分野の質の高いブックリストが提供されるようになった<sup>9</sup>。

ほか、Wikipedia 執筆を用いた学生教育が大学の場で試みられるようになってきたことも注目される<sup>10</sup>。これらは Wikipedia 執筆を一つの材料として、学生に情報リテラシーや文章術を学習させることを主目的としており、専門家が直接執筆するわけではないが、結果的には、専門家のチェックのもとで Wikipedia の記事を改善することに繋がっている。また、これは質の高いウィキペディアンを養成する試みであるともいえる。

筆者も、こうした取り組みに触発され、Twitter を利用して [[Portal:歴史学/東洋史]] の充実化を呼び掛けたことがある<sup>11</sup>。結果としては、専門家というより、従来から熱心にアジア史関連の記事を執筆されていたウィキペディアンの方々の力によってではあるが、充実したブックリストを作成することができた<sup>12</sup>。必ずしも記事を直接執筆せずとも、ウィキペディアンとの交流、参考文献の紹介、ブックリストの作成といった様々な方向で専門家が Wikipedia に貢献しうることは注目に値しよう。

## 2-2 Wikipediaにおける専門家の役割

専門家が Wikipedia に協力する場合、どのようなことが期待され、またどのような協力の方法が考えられるのか、まずは歴史分野に限らずに整理しておく。Wikipedia の側の見解として、[[Wikipedia:独自研究は載せない]] に、専門家が Wikipedia に参加することの意義が以下のように記されている。

<sup>8</sup> <http://www.seiyoushigakkai.org/2021/symposia.html>

<sup>9</sup> 北村氏の Twitter (<https://twitter.com/Cristoforou/status/1396641966788464641>) を参照。なお、「Portal:」から始まる記事は「ウィキポータル」と呼ばれ、特定の分野に対する読者・執筆者へのガイドの役割を果たしている（[[Wikipedia:ウィキポータル]] を参照）。

<sup>10</sup> 尾澤ら, 2012、時実, 2013、北村ら, 2016、河本, 2018 などを参照。

<sup>11</sup> <https://twitter.com/gynaecocracy/status/1394981222049357834>

<sup>12</sup> これに合わせて、[[Portal:歴史学/西アジア史]] も充実したものとなりつつある。

ウィキペディアでは専門家は歓迎されます。しかしウィキペディアでは、専門家は、その話題に関する個人的・直接的な知識だけではなく、その話題に関して既に発表された情報源に関する知識をも持ちあわせているゆえに、専門家であると考えています。……専門家の方々におかれましては、自分達が専門家だからといってウィキペディアで特権的な地位にあるわけではないということをご理解いただき、ウィキペディアの記事を充実させるために、公表されている情報に基づいてご自身の知識を提供くださることをお願いいたします。

ここでは、専門家の参加によって直接的に記事の内容の正確性が増し、記事の質・量が改善されるということのほかに、専門家が持ち合っている「公表されている情報」（参考文献など）についての知識を活かすことが期待されている。後述するが、Wikipediaの執筆に当たっては出典の明記が必須とされているため、直接的な情報に対する知識より、むしろ文献（特に研究著作や概説書）についての知識が求められる場面も多い。専門家はこの点において大きな役割を担う。これに付け加えるなら、記事・参考文献の改善の結果、他のウィキペディアンによる影響をもたらす可能性も無視できない。専門家との交流を通して、ウィキペディアンが質の高い研究成果を知り、記事に反映させることに繋がれば、その相乗効果は計り知れないものがある。実際に筆者も、質の高い記事の参考文献リストを通して有力な研究を知った経験も一度や二度ではない。

ただ、その前提として、専門家だからといって Wikipedia の中で特権的な地位に置かれるわけではないと注意喚起されている点は重要である。 Wikipedia 上では、専門家であることを盾にして議論を展開するのは、権威を振りかざして他の執筆者を攻撃することに繋がり、全く無意味であるばかりか、有害となることもある。詳しくは次章以降でも述べるが、学界でのルールや常識と Wikipedia でのそれには大きな差異があり、場合によっては全く正反対の性質を持ちうる<sup>13</sup>。

先述したように、非専門家が編集に参加可能であるというのは Wikipedia を Wikipedia たらしめている重要な特徴であり、専門家・非専門家の対等性は Wikipedia の根幹である。その意味でも、専門家は「我々が Wikipedia（またその利用者・執筆者）を啓蒙しなければならない」といった態度で Wikipedia に参加するのではなく、あくまで一人の利用者として、他の利用者と同じ立場で参加せねばならないことは強調しておく。

こうした状況を面倒に感じる専門家もいるかもしれないが、こうした Wikipedia の在り方は、決して Wikipedia に特殊な事象ではなく、専門家が自身の専門知と社会の繋がりを考える際に直面する普遍的な課題を反映するものと筆者は考えている。つまり、専門家と Wikipedia の関わり方は、専門家が社会全体とどう関わっていくかという課題と同様に、専

---

<sup>13</sup> こうした学界と Wikipedia の感覚の相違については、山田, 2011 に専論がある。

門家が Wikipedia を改善するという一方向だけで語ることはできない。逆に専門家が Wikipedia から啓蒙されることも多いのであって、両者は双方向の関係性でとらえられるべきであろう。

### 2-3 専門家による Wikipediaへの協力の方法

以上の Wikipedia が専門家に求めること・求めないことを踏まえた上で、専門家が Wikipedia に協力するとするなら、具体的にはどのような方法があるだろうか。日下氏は、 Wikipedia と関わりを持つ専門家の在り方を、以下の 5 つの類型に分けて整理している<sup>14</sup>。

- ①専門家として本気で参加（分野内の監修・統括・議論参加）
- ②専門家として執筆（自分の専門分野の執筆）
- ③個人として執筆（専門分野以外で参加）
- ④教育者として関与（授業での活用）
- ⑤Wikipedia の存在を見越した専門領域での活用（自分の研究成果、所属学会誌のオープン化など）

それぞれの具体例については原文を参照いただきたいが、この分類から示唆されるのは、「 Wikipedia を直接執筆することだけが Wikipedia に協力する方法ではない」ということである。たとえば、誰からでもアクセスしやすい場に論文を発表すること、ウィキペディアンを含めた非専門家にも分かりやすい書籍を書くことなども、広い意味で Wikipedia に協力する方法の一つである。ほか、古典資料の画像データベースを有する図書館が、画像の二次利用の自由化を宣言することも<sup>15</sup>、間接的な Wikipedia 執筆への協力と言えるだろう。

こうした多方面に亘る Wikipedia への協力とその意義については、渡辺智暁氏が以下のように論じている。

より間接的な貢献の方法も存在している。例えば、自分が著作権を有している論文原稿や写真をオンラインで公開して、ウィキペディアへの転載が自由にできるようにブリーライセンスをつけること（広く公衆に利用許諾を与えること）はそのひとつだ。……さらに間接的な形としては、ウェブ上で自由に参照できる質の高い情報を増やすことも、ウィキペディアにとって有用である。ウィキペディアの項目執筆の際に典拠とし

<sup>14</sup> 以下、北村ら、2016, p.222 から引用。

<sup>15</sup> 国立国会図書館「国立国会図書館ウェブサイトからのコンテンツの転載」  
(<https://www.ndl.go.jp/jp/use/reproduction/index.html>) や、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ「コンテンツの二次利用について」

(<https://rmdb.kulib.kyoto-u.ac.jp/reuse>) などがその取り組みの一例。これによって Wikipedia などのオンライン上のコンテンツでの画像使用のハードルが下がる。

て使える資料であれば価値が高いが、そうでなくとも、こうした資料を探すのに役立つ解説であるとか、リンク集の類も、役に立つ。もちろん、このような間接的な貢献は、別に「特にウィキペディアのために」重要なものというわけではない。ソーシャル・ウェブは様々な人が有用な情報や面白いコンテンツを生み出し、共有することで成り立っている生態系である。その土壤を豊かにすることはウィキペディアにも、その他のコンテンツの集約、共有、組み合わせなどを可能にする様々なサービスにも役に立ち、ひいてはインターネットの価値を高いものにしていく<sup>16</sup>。

極端に言えば、出典として引用されるという形で、実はあらゆる専門家が Wikipedia に間接的に協力しているとも言える。以下、本稿では専門家が Wikipedia の執筆を直接行うケースを念頭に置いて述べるが、これがあくまで専門家が Wikipedia に協力する方法のうちの一つに過ぎないということは強調しておきたい。直接 Wikipedia を執筆することに抵抗を覚える専門家もいるだろうが、だからといって Wikipedia との距離を保つことには直結しないし、その上で Wikipedia に協力することもできる。ただ、どの方法を取って Wikipedia に協力するにせよ、次章で述べる Wikipedia の基本的な方針や執筆方法を知っておくことで、その協力をより適切に、そしてより効率的な形で行うことができるだろう。

## 2-4 Wikipedia の執筆に当たって

では、Wikipedia 執筆の際に踏まえておくべき基本的な事柄を紹介しておこう。歴史に関する内容であろうがなかろうが、また執筆者が専門家であろうがなかろうか、Wikipedia の記事を書く際には、Wikipedia 全体の方針に従った記事を書く必要がある。学会誌にさまざまな規定が存在するのと同様に、Wikipedia にも一定のルールが存在する。こうしたルールの中には、最初は理解しがたいものもあるかもしれないが、Wikipedia を執筆場所に選んだ以上、これらは従わざるを得ないものである<sup>17</sup>。

もっとも、実際に執筆してみると、それぞれの決まりにはそれなりの合理性があり、これに従うことがより良いオンライン百科事典の形成に有用であると納得することが多い。こうした Wikipedia 全体の方針として最低限押さえておくべき事柄として、「五本の柱」と「三大方針」が挙げられる。

「五本の柱」とは、「百科事典であること」「中立的観点に基づくこと」「誰でも編集可能であること」「行動規範があること」「確固としたルールはないこと」である（[[Wikipedia:

<sup>16</sup> 以上、渡辺、2011、p.68 から引用。

<sup>17</sup> ただ、直後に述べるように、Wikipedia の五本の柱の一つには「確固たるルールはない」という標語が掲げられている。これは、Wikipedia の改善に当たって障害となるルールがあれば、場合によってはルールを無視してよいとするものであり、常に絶対的なルールが立ちはだかることは想定されていない（参照：[[Wikipedia:ルールすべてを無視しなさい]]）。また、方針・ルールなどは、今後 Wikipedia の中に変化していく可能性もある。

五本の柱]])。そして「三大方針」は、「中立的な観点」 ([[Wikipedia:中立的な観点]])、 「検証可能性」 ([[Wikipedia:検証可能性]])、「独自研究は載せない」 ([[Wikipedia:独自研究は載せない]]) の三点である。これらの各項目については、 Wikipedia 内部に詳しい解説があるので、そちらを参照されたい。

以上の方針を把握したのち、実際に Wikipedia を執筆する際に必要となる技術的な手順（アカウントの作成方法や基本的な編集法）については、日下, 2012 に詳しく紹介されている。

こうして実際に Wikipedia の執筆を始めるなどを決意したならば、最初は下書き (sandbox) を用いて記事の書き方の練習をしつつ、実際の記事に対して細かな修正（誤字脱字の修正や出典の追加、参考文献の追加）を行って Wikipedia の執筆に慣れるとよい。そしてある程度自信がついてきたら、比較的細かな項目を新規立項したり、記述の少ない専門用語の記事への加筆などを行う。また、他言語版の Wikipedia の記事を日本語版に翻訳することで、記事を作成・加筆することも有用である<sup>18</sup>。

専門家による執筆が特に期待されている記事は、いわゆる「大項目」と呼ばれる、記述量が多く、その分野の全体の枠組みを示す役割を持つ記事であろう。こうした記事の執筆は、上で書いた訓練を経たのちに、時間をかけて取り組む必要がある。

実は、日本語版 Wikipedia では、大項目の執筆が遅れ、比較的細かな項目が先に充実する傾向がある。中国史関係の記事を例に挙げると、たとえば [[唐]]、[[宋 (王朝)]] といった大項目の記事は、日本語以外の言語の Wikipedia では一定の水準を満たして「良質な記事」に指定されていることもあるが、日本語版は無典拠記述が非常に多く、現時点では「良質な記事」の水準を満たしていない<sup>19</sup>。その意味でも、大項目の執筆は現時点で喫緊の課題であるといえるが、大項目の執筆には高いレベルの専門知識が要求される上に、 Wikipedia への深い理解と慣れも必要であり、すぐに手を出すのは危険である。大項目の執筆は、専門家が Wikipedia を執筆する際の最終目標と言えよう。

もう一点、「行動規範があること」に関連して注意を促しておく。行動規範といつても様々なものがあるが、ここでは代表的な例として、記事の削除、記事内容の大幅な除去などを行う際に、記事の「ノートページ」での事前の議論が推奨されることを挙げておく<sup>20</sup>。ノートページにおいて執筆者間で議論し、合意を取るという手順を探ったのちに、ようやく実際の作業に手を付けることができる。そもそも、除去・削除に限らず、ノートページを用いて執

<sup>18</sup> 翻訳記事の作成には、著作権など注意すべき問題があり、 [[Wikipedia:翻訳のガイドライン]] を参考にされたい。

<sup>19</sup> ウィキペディアンの間で記事を評価しあってプラスアップし一定の支持を得た場合、「良質な記事」として認められ、記事に青い星の印が附される ([[Wikipedia:良質な記事]])。さらにその上位に「秀逸な記事」がある ([[Wikipedia:秀逸な記事]])。また、他に執筆者同士で記事を批評する場に [[Wikipedia:査読依頼]] がある。

<sup>20</sup> ノートページとは、通常の記事それぞれに付属している管理ページのこと、記事内容の改善のために執筆者・読者が質問や議論を行う場である。詳しくは [[Help:ノートページ]] を参照。

筆者間で話し合いながら記事を執筆することは、誰もが執筆可能である Wikipediaにおいて大きな意義を持っている（[[Wikipedia:合意形成]]、[[Wikipedia:ノートページのガイドライン]]を参照）。ある記事の執筆に参加している他の利用者が、その分野に詳しい人であるとは限らないわけだが、そうした場合でも、合意形成の上での編集が推奨されることには注意されたい。

### 3 歴史関連の記事ならではの問題点

#### 3-1 検証可能性

以下、歴史関連の記事を執筆する際に特に問題となる点を詳しく述べる。前章に掲げた方針のうち、歴史を専門とする研究者が最初に引っ掛かりがちで、実際に筆者も戸惑いを覚えたのは、「検証可能性」の方針である。

「検証可能性」の方針とは、「信頼できる情報源」からすでに公開されている情報だけを Wikipedia に記載し、そしてその情報源を明示することにより、記事の内容を読者が容易に検証できるようにするものである<sup>21</sup>。[[Wikipedia:検証可能性]]には「「真実かどうか」ではなく「検証可能かどうか」」という原則が示されている。

たとえば、専門家が自分の専門の概説記事を書いたとしよう。確かに、読み手が同業者であれば、一読でその内容の質が高いことが伝わるかもしれない。しかし、Wikipedia 上では専門家だからといって特別扱いされるわけではなく、専門家として名乗って編集をしたところで、それは所詮「自称」専門家であることを示すに過ぎない。結果、誰が書いたところで、その記事の読者と他の執筆者は記事内容を無条件で信用するわけにはいかなくなる。そこで、読者が「信頼できる情報源」に辿りて記述の真偽を検証できる状態にすること、つまり記事内容を「検証可能にすること」が求められる。こうして、「真実かどうか」よりも「検証可能かどうか」を重要視する原則が出来上がるわけである。

この際、「信頼できる情報源」が何かということが問題になる。これは[[Wikipedia:検証可能性]]、[[Wikipedia:信頼できる情報源]]などで定義がなされており、歴史関連の記事の場合に想定されるのは、査読制度のある雑誌論文や新聞記事、また大学レベルの教科書、権威のある出版社による書籍などである。ただ、こうした基準はあるものの、実際に何を信頼できる情報源とみなすかは議論が分かれるポイントでもある。Wikipedia の出典として用いるのに適切な文献かどうか精査し、その判断に基づいて文献を用いることが、専門家に特に求められることといえよう。

さて、以上の方針からすると、Wikipedia の記事の出典として、いわゆる「一次資料」は

---

<sup>21</sup> 情報源・出典は基本的に注釈によって示される。Wikipediaにおける出典の書き方は[[Wikipedia:出典を明記する]]に示されている。

望ましくないということになる。一般の読者は、一次資料を見たところで記事内容の検証をすることは難しい。一次資料はあくまで研究対象であって、そのまま「信頼できる情報源」として用いることはできないのである。[[Wikipedia:信頼できる情報源]]には以下のように記されている。

一般に、ウィキペディアの記事は一次資料に基づくべきではなく、むしろ一次資料となる題材を注意深く扱った、信頼できる二次資料に頼るべきです。ほとんどの一次資料となる題材は、適切に用いるための訓練が必要です。特に歴史についての主題を扱う場合がそうです。

これは当然のことと思われるかもしれないが、徹底して一次資料を排除しようとすると、専門家としては奇妙に感じられる執筆になることもある。一例として、筆者が[[春秋經伝集解]]を執筆した際の記述を用いて説明する。『春秋經伝集解』の著者である西晋の杜預は、当時新たに発見された『竹書紀年』といった出土資料を調査し、従前の歴史書と突き合わせて、以下の結論を導いた。

『竹書紀年』の内容は『春秋左氏伝』と符合する場合が多く、これは『左伝』が『春秋公羊傳』『春秋穀梁傳』より優れたものであることを示している<sup>22</sup>。

研究論文であれば、この情報の出典は杜預『春秋經伝集解』後序の原文「諸所記多与左伝符同、異於公羊穀梁、知此二書近世穿鑿、非春秋本意審矣<sup>23</sup>」を示せば済む話である。ところが Wikipediaでは、この方法は推奨されていない。あくまで「一次資料を注意深く取り扱った二次資料」、つまりは信頼できる専門家の書籍や論文を典拠に用いて、杜預が上の内容を表明していることを示さなければならない。

そこで、実際に[[春秋經伝集解]]を見ていただければ分かる通り、筆者は上の情報に対して専門論文（吉川, 1999, p. 87）と研究書（川勝, 1973, pp. 91-92）を出典として挙げ、一次資料は用いていない。一つの情報に対して二つ以上の出典を示すのは推奨された行為であり（[[Wikipedia:信頼できる情報源#情報源の評価]]）、これによって専門家の共通認識を示すことができる。

歴史の専門家としては、この例のように疑いのない明らかな一次資料の典拠がある場合に、わざわざ二次資料である研究書に根拠を置かねばならないのは苦痛に感じることもあるかもしれない。ただ、先述したように、これは誰もが編集できる百科事典を運営するためには止むを得ないルールである。Wikipediaの執筆には、学術書の執筆とは異なる感覚で向

---

<sup>22</sup> [[春秋經伝集解]]より引用。

<sup>23</sup> 阮元刻本『重刊宋本左伝注疏附校勘記』後序、十七葉裏。

き合わなければならない。

なお、例外的ではあるが、一次資料と二次資料を併記するという方法や、一次資料とその翻訳を示す方法が有効なケースもあるので、付記しておく。たとえば、歴史上よく引用される有名な部分であれば、一次資料の翻訳を示すことで百科事典としての記事の充実化に貢献できるであろう。以下は、筆者が[[史記]]を執筆した際の記述である。

加えて、司馬遷は当時の春秋公羊学の領袖である董仲舒の説を敷衍して孔子の『春秋』執筆の目的を論じている。

子曰く、我れ之を空言に載せんと欲するも、之を行事に見（しめ）すの深切著明なるに如かざるなり、と。（孔子は「私はそのことを抽象的な言葉で記述しようとしたが、それよりも、これを人々が実際に行った具体的な行為の迹において示すほうが、はるかに切実であり鮮明なのだ」と仰った。）<sup>24</sup>

ただ、こうしたケースであっても、記事に用いた直接の出典は、『史記』太史公自序の原文「子曰、我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也」ではなく、二種の研究書（吉本, 1996, p.125、川勝, 1973, pp.46–47）を出典として提示している。

どのような文献を出典に用いるべきかという点については[[Wikipedia:信頼できる情報源]]に書かれているが、特に中国史関連の記事を執筆する場合、日本語版 Wikipediaにおいて中国語の文献を出典として用いてもよいのか、という疑問が生じる。これについて、[[Wikipedia:検証可能性]]には以下のように記されている。

ウィキペディア日本語版では、可能な限り日本語による情報源を示すべきであり、常に日本語による情報源を日本語以外の言語による情報源より優先して使用すべきです。これは、情報源の資料が正しく使用されていることを、日本語版の読者が容易に検証できるようにするためです。

つまり、出典として用いる研究は、同じ内容を示すのであれば日本語文献が優先され、外国語の研究でも日本語訳があればそちらが優先される。ただ、「可能な限り」とある通り、外国語文献の研究にしか示されていない研究の場合などに出典として用いるのは構わない。ほか、言語の問題がなくとも、絶版となった本や入手困難な文献を用いるのではなく、誰もがアクセスしやすい文献、図書館に多く所蔵されている文献を用いるといった配慮も有効であろう。

もっとも、このあたりは厳密に考えすぎる必要はなく、情報源を複数示すという方法を採

---

<sup>24</sup> [[史記]]から引用。

って、日本語版の読者の情報へのアクセス性を意識した文献と、専門性を意識した文献（外国語文献などを含む）の両方を示すことも可能である。ここまで繰り返し述べてきたように、Wikipediaの記事の参考文献に何を用いるべきかという問題は、専門家の腕が最も試される部分であり、逆に言えば、専門家が Wikipedia に協力するに当たって最も期待されている部分でもある。

さて、実際に Wikipedia を執筆してみると、「検証可能性」を満たしていない記事、つまり情報源を示した出典が存在しない記事があまりに多いことに辟易とするかもしれない。これは現在の Wikipedia の大きな問題点ではあるが、必ずしも現在の執筆者に問題があるわけではなく、過去の Wikipedia の方針では出典を逐一示す必要がなく、末尾にまとめて示せばよかつたことに起因するケースもある。ただ、現在では、情報源を示す出典は必須とされており、筆者の経験では、できるだけ細かく、一文単位を基本として出典を示す注釈を附すとよい（ただ、ルールとして一文単位の注釈が必須とされているわけではない）。つまり、注釈を附す際の感覚も、学術論文におけるそれとは大きく異なり、全ての情報に細かくその出典を表示せねばならないということである。最初は面倒だが、出典を入力するための便利なツールも用意されており、慣れるとむしろ分かりやすく、また閲覧者や後の執筆者にとっても便利な方法であることに気が付くだろう。

### 3-2 独自研究

前節で、複数の二次資料を出典とすることによって「専門家の共通認識を示す」と書いた。ここで「共通認識」と述べたのは、たとえ信頼できる情報源に書かれている学説であったとしても、僅かな少数派にしか支持されていない説の場合、「独自研究」と認定され得るからである。ここでは、 Wikipedia の三大方針の一つである「独自研究は載せない」の方針と歴史関連の Wikipedia 記事を書く場合の注意点について述べる。

[[Wikipedia:独自研究は載せない]]によると、 Wikipedia における「独自研究」は、どこにも発表されていない研究を個人が勝手に Wikipedia に書く行為を指す場合が多いが、ごく少数だけが唱えている特殊な学説を記事に載せる場合にも適用されうる。

大前提、 Wikipedia では両論併記が認められているから、異説がある場合には、それぞれの出典を示したうえで異説を列挙することは可能であるし、その方が質の高い記事になるケースも多いだろう<sup>25</sup>。ただ、いずれにしても、執筆の際の心積もりとして、「この専門家のこの説は特徴的だから、ぜひ記事に書かなければ」という態度、また「これをこう考えるのが私の考え方だから、そのように書かなければ」という態度は、 Wikipedia には求められない。そうではなく、「この点は多くの専門家において同じ意見が持たれているであろ

---

<sup>25</sup> さまざまな「信頼できる情報源」からいかに情報を引き出し、記事を執筆すべきかという点については、[[Wikipedia:中立的な観点]]に詳しく述べられているので合わせて参照されたい。

うから、これを記事に書こう」という態度、つまり無個性的に共通認識を記述していく態度が求められる。

つまり、Wikipedia執筆において、専門家は個性を出す必要はないのである。特に自分の専門に近い内容の記事を執筆する場合、専門家独自の「味」を出したくなるものだし、そもそも特定の執筆者がいる以上、こうした個性を完全に排除することは不可能である。しかし、Wikipedia執筆に当たっては、少なくとも無個性に徹しようとする努力が求められるし、個性を出すことに抑制的になるべきである。

以上、歴史関連の記事を書く場合の注意点について述べた。筆者は、三大方針のうちで「検証可能性」が最も明確で、かつ重要な基準であると考えている。なぜなら、「独自研究」や「中立的観点」に比べ、誰もがより明確な基準から記述内容を精査できるのが「検証可能性」の有無だからである。Wikipediaの執筆に携わる際には、まず特に「検証可能性」を守ることに気を付けるとよいだろう。

### 3-3 Wikipediaと歴史問題

最後に、歴史関連の記事を執筆する上で、避けては通れない今日の歴史問題に絡む内容を取り上げたい。敏感な歴史問題を孕む記事においては、記事内容の著しい偏りや編集合戦の発生など、特殊な問題が生じることがある。こうした例は、Wikipediaの負の面を示す代名詞的存在であり、専門家が Wikipediaをためらう要因になることもあるだろう。

まず強調しておきたいのは、実際のところ、こうした問題が生じる記事が数多いわけではないことである。特に、先述した Wikipediaの方針を守っている限りは、歴史関連の専門的な記事を執筆する際にこうした問題に巻き込まれることはほとんどないと思われる（筆者もその経験はない）。

ただ、誰もが編集に参加できるという特性上、社会で耳目を集める Wikipediaの記事に対しては執筆が集中しやすく、そこに見解の相違が生じた場合、容易に編集合戦と呼ばれる状態に陥ることは確かである（[[Wikipedia:編集合戦]]を参照）。また、編集合戦に陥らずとも、そのコミュニティ内での歴史認識の偏りがそのまま記事に反映されるケースも多いと推測される<sup>26</sup>。さらに、このような敏感な問題に対する記事は、熟練のウィキペディアンもなかなか手を出せないため（むしろ熟練であるほどこうした問題と関わる記事の執筆は避

<sup>26</sup> [[南京事件]]、[[南京事件論争]]、[[南京事件論争史]]といった記事はその一例であり、佐藤由美子氏の「日本語版ウィキペディアで「歴史修正主義」が広がる理由と解決策」

（<https://yumikosato.com/2021/01/09/japanese-Wikipedia/>）において歴史修正主義的な説が日本語版 Wikipediaに取り込まれている点が指摘されている。ただ、佐藤氏の記事には基本的な事実誤認も多く、北村紗衣氏のブログ「Commentarius Saevus」の「佐藤由美子さんの「日本語版ウィキペディアで「歴史修正主義」が広がる理由と解決策」について」

（<https://saebou.hatenablog.com/entry/2021/01/17/000000>）ならびに「ウィキマニアの発表が YouTubeにアップされました」

（<https://saebou.hatenablog.com/entry/2021/08/17/004843>）でその問題点が指摘されている。

けようとするかもしれない）、なおさら内容が改善されないという悪循環に陥っている。

日本語版の Wikipedia は、あくまで日本語を主言語に用いる Wikipedia というだけであって、日本人のための Wikipedia ではないし、日本国家の見解を反映する場というわけでもない（[[Wikipedia:日本中心にならないように]] を参照）。しかし、日本語話者は日本に集中しているため、現代日本社会の多数派（または声の大きい人々）による認知が、日本語版 Wikipedia に反映されやすいという側面はある。

では、こうした歴史問題に関わる記事の内容は、どのような手順を経ればブラッシュアップできるのだろうか。筆者が有力と考える方法を三点挙げておく。

一つ目は、先述した土木学会応用力学委員会の取り組みのように、学会等による Wikipedia 協力への呼びかけを行うことである。当然だが、学会の活動として専門家を Wikipedia に巻き込むことにより、専門知識を有する執筆者が増えれば、Wikipedia の情報の全体の質が高まる。もちろん、歴史問題に直接触れる記事は専門家の間で異論も多かろうから、専門家の参加によってすぐに上記の問題が解決されるとは限らない。また、そもそも Wikipedia の記事は最終的な「完成形」があるものではなく、絶えず修正されうる動的な状態にあるのであって、「専門家が集まって書けば全部解決」という類のものでもない。ただ、多くの専門家の参加があれば、当該記事だけではなく、周辺的な記事の整備もなされることに繋がり、総体的な質の向上が期待されることは確かである。また、日本語版 Wikipedia においては、良質な執筆者の不足だけではなく、管理者の不足も深刻であると言われているが<sup>27</sup>、執筆者の増加にともなって管理者の増加も期待される。

二つ目は、事実とは認めがたい歴史叙述を行う書籍等に対する批判を、公的な場で行い続け、その批判が Wikipedia の出典として用いられるようにすることである。さきほど、 Wikipedia の記事を支える重要な方針として「検証可能性」を挙げた。逆に言えば、一応の「信頼できる情報源」としての条件さえ満たしてしまえば、その記述を排除するのは Wikipedia のシステム上難しい<sup>28</sup>。もちろん、 Wikipedia としてもこうした状況を放置しているわけではなく、[[Wikipedia:信頼できる情報源]] に何をもって信頼すべき情報源とすべきかということについて念入りな説明を行ったうえで、「特別な主張」として「支持されていない主張や、関係学会に普及している見解に矛盾する主張」を挙げ、「提案者が、そうした人々が沈黙している理由に陰謀論を用いている場合は特に気をつけてください」と陰謀論に対する注意喚起を行っている。

しかし、現実的には、ある文献が明らかに偏った記述をしていたとしても、その著者が専門家として権威ある地位に就いていたり、他者から一定の評価を集めていたりした場合、

<sup>27</sup> 各言語版の登録者数と管理者数の統計は、[[Wikipedia:全言語版の統計]] を参照。

<sup>28</sup> 特殊なケースではあるが、英語版 Wikipediaにおいて、全く架空の参考文献に基づいて書かれた、架空の歴史事象に対する記事が「良質な記事」に選ばれ、数年残り続けたこともある。[[Wikipedia:ビコリム戦争]] を参照。

「信頼できる情報源」ではないと断じて記述を排除するのは容易ではない。結局、外的な基準で「信頼できる情報源」を満たした文献を出典に用いていれば、Wikipediaでいう「検証可能性」を満たしているということになり、いわゆる「トンデモ説」であっても Wikipedia の記事から排除できない、という状況が生じうる。

これに対抗する手段の一つが、そうした書籍に対する批判を「信頼できる情報源」として認められる場（書籍、学術雑誌など）で発表しておくことである。元の記述を排除することはできなくても、その記述に対する批判が「信頼できる情報源」として認められる場で発表されてさえいれば、その批判を Wikipedia の記述に盛り込むことができるようになる。この方法は、両論併記的な記事になってしまふため、双方の主張に妥当性があるかのような印象を与えてしまうおそれはあるが、百科事典の記事として最低限必要な情報を内容に盛り込むことはできるだろう。

この例も、専門家が Wikipedia を直接執筆するわけではないが、Wikipedia の改善に貢献しうる行為の一つである。いわゆる「トンデモ説」の否定は、専門家の間では通俗的とされ好まれない仕事なのかもしれないが、ゆくゆくは Wikipedia の質の向上にも効果があるということは指摘しておきたい。

三つめは、いわゆる「トンデモ説」を、それ自体で独立した記事として立項し、その歴史や社会的背景などを書くという方法である。この例に [[ホロコースト否認]] という記事があり<sup>29</sup>、いわゆるホロコースト否定論の歴史的経緯、学術界の反応、その主張に対する反論などが整理されている。これも Wikipedia の枠内でトンデモ説に対抗する場合に有力な手段となり得るが、先と同じく、こうした記事を書くためには「トンデモ説」そのものに対する研究の蓄積が欠かせない。この方法を取るにせよ、結局はトンデモ説を否定する文献が必要になってくる。

## おわりに

前節で述べたように、誰もが編集に参加できるという特性上、Wikipedia はそれを支える社会の認知を反映しやすい媒体である。その意味からいえば、専門家による Wikipedia への参加が乏しい現状は、専門家と社会の距離が遠い現代日本社会の在り方を象徴するのかもしれない。

Wikipedia の内容を改善したいのであれば、それを構成する社会の認知を変えなければならない。Wikipedia 自体にさまざまな課題があることも確かだが、Wikipedia の内容が問題だらけに思えるとき、その原因の一端は社会全体が担っている。そしてこれは、逆もまた然

---

<sup>29</sup> [[ホロコースト否認]] は、もともと英語版 Wikipedia の記事 ([https://en.wikipedia.org/wiki/Holocaust\\_denial](https://en.wikipedia.org/wiki/Holocaust_denial)) の翻訳により作成された記事である。

りである。これだけ Wikipedia の影響力が増した今、社会に専門知を提供する場として、Wikipedia というものは非常に有力なツールとなった。社会が Wikipedia を変えるのと同じように、Wikipedia が社会を変えるという面もあり、この両者は相互的な営みの中で変化しあう関係にあると言える。

果たして現状は、この相互的な営みの中で、専門家が十分な役割を果たしているといえるだろうか。もちろん、Wikipedia の大前提は自由意志による参加であり、専門家は必ず Wikipedia にせよ、ということが言いたいわけではない。ただ、先述したように、自ら協力を望まずとも、専門家は Wikipedia に巻き込まれうるものであることは知っておいてよい。その上で、専門家が Wikipedia にどう向き合うべきか、改めて考えていただきたい。

本稿では触れられなかつたが、Wikipedia の執筆が専門家個人にもたらす直接的なメリットも大きいと筆者は考えている。ある一つの事柄について、誰が読んでもその概要や背景が分かるように執筆するのは簡単なものではない。出典表示が必須とされることも相まって、自分の専門領域の事柄であったとしても、Wikipedia の執筆に当たっては必然的に多くの文献を読み直すことになる。そしてその過程では、必ず新たな発見があるものである。また、新書といった形で一般向けの書籍を書く機会に恵まれる専門家が数少ない現在、Wikipedia を専門家が自己研鑽の場とする意義が広く認められてもよいだろう。本稿で繰り返し述べたように、Wikipediaにおいて専門家・非専門家の立場は対等であり、専門家が Wikipedia を改善するだけでなく、Wikipedia 執筆を通して専門家が啓蒙を受けることが多い。

結局のところ、Wikipedia に参加するか否かは、専門家の自由に任せられている。ただ、Wikipedia に参加することによって、専門家が自らの学識と社会の繋がり方を考える上での有力な示唆を得られることは確言できる。多くの方の参加・協力を期待したい。

#### 〔参考文献〕

- ・尾澤重知・森裕生・江木啓訓「Wikipedia の編集を取り入れた授業における学習者の投稿行動の特徴と学習効果の検討」（『日本教育工学会論文誌』36-Suppl, 2012, p.41-44）
- ・川勝義雄『史学論集』（朝日新聞社, 1973）
- ・北村紗衣・日下九八・吉本秀之・藤本大士「ラウンドテーブル ウィキペディアと科学史：知識とコミュニケーションを考える 日本科学史学会 63回年会シンポジウム報告」（『科学史研究』55, 2016, p.221-225）
- ・日下九八「ウィキペディア：その信頼性と社会的役割」（『情報管理』55-1, 2012, p.2-12）
- ・日下九八「ウィキペディアの基本的な編集方法と考え方 間違いを正しく編集する」（『情報管理』55-7, 2012, p.481-488）
- ・河本大地「大学初年次における「身近な地域」の調査とウィキペディア編集—奈良のならまちでの実践からみた有効性と課題—」（『E-journal GEO』13-2, 2018, p.534-548）

- ・佐藤翔・井手蘭子・太田早紀ら「日本の大学生の Wikipediaに対する信憑性認知、学習における利用実態とそれらに影響を与える要因」（『情報知識学会誌』26-2, 2016, p.195-200）
- ・時実象一「ウィキペディア教育の経験」（『情報知識学会誌』23-2, 2013, p.185-192）
- ・長塚隆・神野こずえ「学生における Wikipedia 日本語版の利用動向」（『情報知識学会誌』21-2, 2011, p.149-156）
- ・山川優樹・柴田俊文・中井健太郎「専門知識の発信による学会の社会貢献 土木学会応用力学委員会の ウィキペディアプロジェクト」（『情報管理』55-11, 2013, p.819-825）
- ・山田晴通「ウィキペディアとアカデミズムの間」（『東京経済大学人文自然科学論集』131, 2011, p.57-75）
- ・吉川忠夫 「汲冢書発見前後」（『東方学報』71, 1999）
- ・吉本道雅 『史記を探る』（東方書店, 1996）
- ・渡辺智暁「われわれはウィキペディアとどうつきあうべきか：メディア・リテラシーの視点から（〈特集〉ソーシャルサービス活用指南）」（『情報の科学と技術』61-2, 2011, p.64-69）

#### 〔謝辞〕

本稿の執筆に当たって、早稲田 Wikipedian サークルの大宮さん、富さんに有力な助言を受けた。また、本稿で触れた「ウィキペディアンと琉球・沖縄史の専門家との交流を通し、沖縄・琉球関連の Wikipedia 記事充実を図る懇話会」での議論にも大きな啓発を受けた。ここに謝意を示す。

---

田尻健太（たじり・けんた）

1995 年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程に在籍中。専門は中国思想史で、特に経学（儒教の聖典である経書に関する学問）の研究を進めている。広く中国学に関わる専門的な事柄を一般の方にも分かりやすく説明するため、ブログ「達而録」（<https://chutetsu.hateblo.jp/>）やツイッター（@gynaeocracy）で活動しており、その一環として Wikipedia 執筆にも協力してきた。